慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 二人の福澤門下生と彼等が創った学校 : 奥愛次郎・宮澤順定と広島県日彰館 |
| Sub Title | |
| Author | 坂井, 達朗(Sakai, Tatsuro) |
| Publisher | 慶應義塾福澤研究センター |
| Publication year | 1987 |
| Jtitle | 近代日本研究 Vol.4, (1987. ) ,p.125- 159 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 福澤門下生特集 |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-19870000-0125 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 二人の福澤門下生と彼等が創った学校

## ——奥愛次郎・宮澤順定（ジュンジョウ）と広島県日彰館——

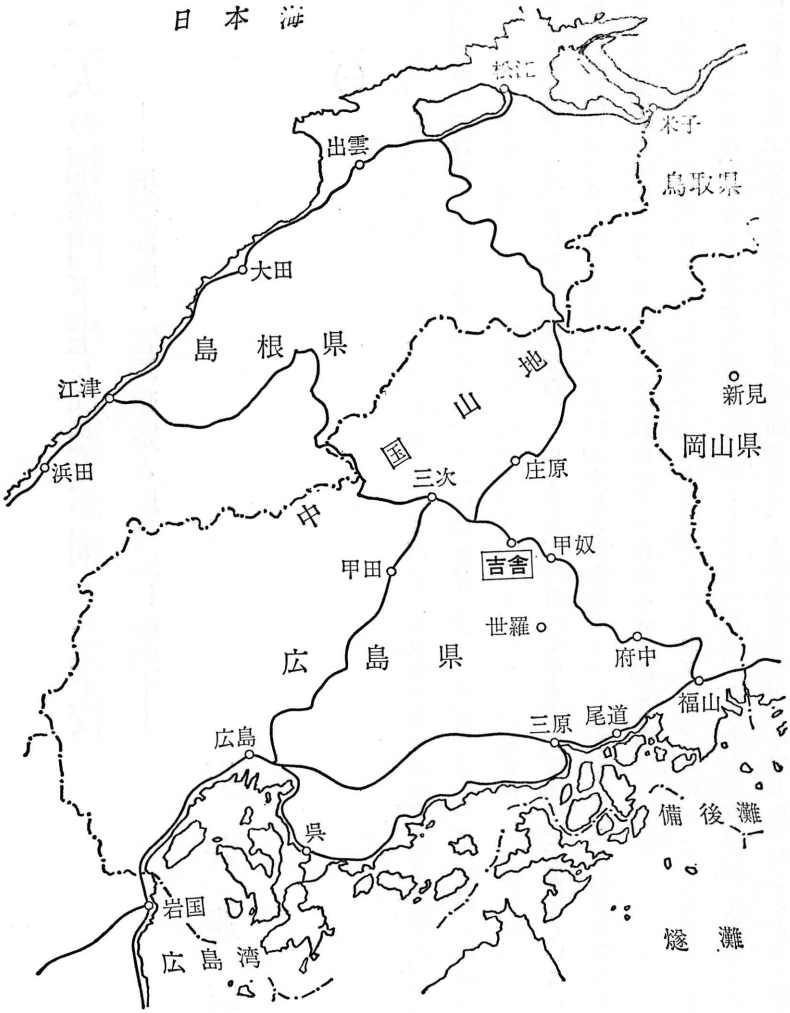
坂井達朗

### (一)

広島県の北部、鳥取・島根との県境に近い中国山地のほぼ中央に位置する今日の双三（フタミ）郡吉舎（キサ）町に私立日彰館中学校が認可されたのは明治三十五年であるから、この学校（現在は県立日彰館高等学校）は広島県の旧制中学校としては、県立第一中学校（広島）、県立誠之館中学校（福山）と並んで、県下で三番目に古い歴史を持つことになる。

全国的に見ても決して短くはない伝統を持つこの学校が、今日でも中央文化の光のとどきにくいこの山間にこのように早い時期に設立されたことには、その陰に今日とは異なる人口の分布や交通体系の在り方があったとしても、それだけからは説明しつくせない意味と理由があったことを推測させる。

事実、隣接する今日の庄原市には明治初年すでに英学校が設けられていたことは、この地方が新文明の導入に如何に熱心であったかを示すに十分なものがある。[1] そうしてこの事は、この地方が鉄道網の完成を見る以前には、山陰・山陽を結ぶ陸上交通の最短ルート上の要衝であり、人や物資の移出入の劇しかったことと切り離しては考


日本海
松江
米子
出雲
鳥取県
大田
島根県
江津
浜田
国山地
新見
岡山県
三次
庄原
中
甲田
吉舎
甲奴
世羅
府中
広島県
福山
三原
尾道
広島
呉
備後灘
岩国
広島湾
燧灘

えられないであろう。

しかしこの地域のいくつかの町村の内で、江戸時代に小なりとは言え藩という小宇宙の中心地であった三次であったのならともかくとして、天領の中の一宿場町にすぎなかった吉舎に、しかもここにのみ、このような早い時期に私立の中等教育機関が設けられ、またその後の困難な条件を乗り越えて、私立として七十年に近い命脈を保ったことは、[2] 単に立地条件や時代の趨勢に帰しえない人間的条件の介在を前提としなければ、理解できないものがある。殊にこの学校が二人の若い同窓生の協力によって、非常な苦心と努力によって経営されてきたことを知れば、我々はそれをはぐくみ育てた人の人格や情熱によるところが大きかったことを考えざるをえないのである。

以下にこの二人の福澤門下生の教育活動の詳細を検討し、そのことを通じて、福澤の思想的影響がどの様に全国各地方に広められていったかを考えるための手がかりを得ることを試みる。従来明らかにされてきた門下から輩出した多くの人材の活躍は、主として大都市を中心としたものであった。その事蹟ははなばなしく、又後世に伝えられるものも少くない。しかし、地方にあって、世間に喧伝されることもなく、したがって世俗的な意味では恵まれることの少ない、地味な活動こそが、福澤の思想的影響の伝播のためにはより大きな現実的意義と重要性をもっていたと考えるからである。[3] この二人の門下生の学校経営の理念と実態を明らかにし、彼らの言説はともかくとして、その生き方の中に、福澤の思想的影響がどの様な影を落していたかを解明しようと試みる。

(1) 緒方塾で学んだ医師田部百谷らの提唱によって明治七年ころ開設された「又新舎」がそれである。

(2) 日彰館は昭和四十五年県に移管された。

(3) 明治四十二年六月刊行の「慶應義塾出身名流列傳」(三田商業研究会代表・野依秀一発行)は当時各界で活躍している「名士」四八三名を選んでその業績を紹介している。宮澤順定もその中の一人に選ばれ「官立中学続設の為め私塾の滅亡せしもの極めて多し、然るに難戦苦闘と駢び駆って進むものありとせば幷は経営者其人を得たるに帰せずんば非す、我が宮澤順定氏の如き実に其標範なり」として、日彰館をめぐる彼と奥との「奮闘史」が略述されている。本書がどの程度流布し、又どの様な社会的影響を持ったか詳にしえないが、宮澤の活躍が少くとも三田出身の人々の間にはある程度まで知られていたことを示している。しかしこの書物の性格から考えて、それはあくまでも三田出身者という狭い範囲を越えるものではなかったと考えられる。

## (二)

慶應義塾が高度の専門教育を目的として、明治二十三年に開設した「大学部」に対しては、「教職員、塾員ばかりではなく、塾生や世間一般の人もまた大きな期待をもったようである」[1]と言われている。「慶應義塾百年史」中巻には「大学部が設けられたことをきいて、大学に進むのを目的として、遠い地方から上京して義塾に入学した例もあった」[2]として、池田成彬や鎌田栄吉の回想があげられている。

明治二十二年の末、長野県更級郡西尾村(現松代町)から上京した十九歳の宮澤順定の場合も正にその一例であったと言えよう。彼は前年の五月長野県尋常中学校(在松本)を卒業しており、二十三年一月に行なわれた、大学部第一回生の募集を目指しての上京であった。しかし彼は、この時直ちに大学部に入ることはできず、一年間は準備のために学ぶことを余儀なくされている。明治二十三年の「勤惰表」[3]によれば、第一期(一月~四月)は本科四等、第二期(五月~八月)及び第三期(九月~十二月)は同三等に名前が見出される。翌二十四年の第一期には本科二等に在籍し、約半分の科目については評点がついていることから考えて、本科一等に進んで卒業するのを待たず、この年の第一期の内に行なわれた入学試験に合格して、大学部に入ったものと想像される。

若い日の宮澤は将来への夢を様々に描いていた。最晩年になって、一生をふり返って手作りしたアルバム「自編・澤翁の種々相」の第一頁に彼は十代末から二十代初めに撮った肖像写真三葉を並べて、それぞれの脇に「政治家の夢」、「哲学者の夢」、「文学者の夢」と書き込んでいる。明治十年代後半の、自由民権運動最後の高揚期に中学校生活を送った彼が、始め政治を目指したことは理解しやすい。しかし彼の関心はやがて現実の世界からむしろ観念の領域へと移行し、哲学や文学を志向するようになったのであろう。進学に当って文科を選んだのはそのためであったと思われる。

大学部在学中の勉強や生活を示すものは今日ほとんど残されていない。ただ三カ年の後、卒業する際の記念として製作された集合写真（個人の肖像写真を配列して一枚に焼きつけたもの）があったことが、帰郷した宮澤の許へ友人佐藤要吉から送られた手紙によって知られる。

「その味幾とせか忘れかね給ひつる故さとの火燵に、錦衣たまひしまま首つたけに這入らせられて、幾夜の寝さめ忍はせられし四方の山の雪景色下物にきこしめさるゝ君が得意眼のあたりなる心地して、君が恙なからむハ問ひまつる要なからむ。夫の写真ハ帰郷し玉ひし当日の夕ぐれ受取り来れり。君が持ち帰り給はさりしのみぞ返す返すも口惜しき次第なる。その様……」[4]

として、福澤を中心に左右にロイド、リスカムを置き、ランデス、小幡、門野、ライド、エーマン、リース、飯田、坂田、森の各教授達[5]の肖像に混ざって、今村猛、佐藤要吉、石田新太郎、竹内左馬次郎、宮澤順定、忽滑谷快天の文科二回生が、それをとり囲んだ写真の構造が図示されている。宮澤の卒業証書には、リスカムをのぞいて、これらの教授達が全員署名捺印している所から考えて、この写真は在学中、直接指導をうけた先生達を偲んで作られたものであろう。

卒業した後の彼等は、一旦故郷に帰る者、東京に残ってさらに勉強を続ける者、それぞれであるが、やがて一、二年の内には大部分がいずれかの学校（主として中等学校）の教員になって全国に散って行く。佐藤から宮澤に宛ててこの時期に書かれた数通の書簡が残っている。それによってその間の事情を見ると次のようである。

今村猛（後に恵猛と改名）は卒業後しばらくは東京に残っていた様であるが、二十八年六月には故郷に帰っており「上京の噂さを聞かず一旦風雲を得ばと北陸に腕を扼して光焔万丈なるに似たり。尤も当今は絶好の材料を得て同じ藩の俊才橋本左内の伝を草しつつありとも伝ふ。これも実なるべし」とされ、二十九年九月の「慶應義塾塾員学生姓名録」[6]には、福井県尋常中学校小浜分校教員とある。

元来僧籍にあった今村はその後本願寺派の開教師としてハワイに渡り（明治三十二年）、同派布教活動の重鎮となり、布哇開教課長、布教総監督、布哇別院輪番等を歴任する。「布哇開教誌要」[7]「本派本願寺布哇開教史」[8]等の著者である。

石田新太郎は福島県三春の出身であるが、東京に残って[9]、ドイツ哲学、教育学、心理学などの勉強を続けたが、「近日ヘルバルト派教育論につき大いに気焔を吐かるへく候」と報ぜられている。彼はその後、陸軍士官学校、東京及び広島の幼年学校、台湾総督府国語学校の教官や教頭として手腕を振い、欧米に派遣されて教育視察をし、帰朝後、明治四十一年四月から義塾大学部教員となった。同年六月、塾の制度改革が行なわれ、新たに「塾長を補佐して一般の塾務を処理し、塾長不在のときは代理をする」「幹事」の制度が設けられるや、四十歳の若さでこれに選任されて、昭和二年に死亡するまで義塾の運営の中枢にあり、文学科の刷新、医学部の創設など塾史に大きな足跡を残した[10]。

竹内左馬次郎は、卒業後故郷の岡山県和気郡に帰り、私立中学校閑谷黌の教員となるが、その後石田と同様に

台湾総督府国語学校に転じ、やがて母校に帰って長く大学部予科の教員を勤める。

忽滑谷快天は埼玉県入間郡の寺院の出身であるが、卒業後すぐに曹洞宗高等中学林教授となった。禅宗の啓蒙に関する多数の著書を残し、後年長く駒澤大学の学長を勤めた学僧である。

佐藤要吉自身は、はじめ福岡県柳河の伝習館中学校に赴任したが、ほどなく埼玉県立第二中学校（熊谷）を経て新潟県の新発田中学校に移り、さらに同高等女学校の新設とともに校長に迎えられ、晩年は同地に私立技芸女学校を設立して死に致るまでその校長を務めた。今日の私立新発田中央高校の創立者である。[11]

このような友人達の動静の中にあって、宮澤の場合、卒業後の経歴は、友人達のそれに比して単純であるが、その最初の第一歩は、非常に劇的なものであった。晩年の彼が、自分が一生を捧げてきた学校・日彰館の「秘史」[12]として書き残したノートによると、そのいきさつは次の様であった。

明治二十六年十二月、大学部を卒業した彼は、ひとまず帰郷して、一月二十六日の卒業證書授与式に上京参加した。式終了後、在学中の寄宿先であった芝公園内の紅林家を訪ねて挨拶をした。紅林家の先代員方氏[13]は「旧小浜藩の士族にて……藩公の侍者であったが、維新後泰西の語学を修め英佛独の三国語ニ通ッ外務省翻訳官となり時めく高等官」であったが、肺結核で明治十六、七年頃に死亡し、未亡人と二男四女とが残されたため、一家の生計のために一方で自宅を素人下宿にするとともに、子供達は学業を中断して就職していた。

「苦学生」であった宮澤は、在学中この家に止宿し、「若干の夜学生を集めて英数漢の教授をして居た」のであるが、紅林家の長男で、家計補助のために中学校を卒業しなかった員雄氏もその生徒の一人であった。宮澤は彼の勉強の相手をして、「中学卒業の学力を与へ海軍兵学校を受験する程度ニ進め」ていたのであった。

この日紅林家で、宮澤は偶然一人の人物に出逢った。そうしてこの出逢いが、彼の一生を決定することになり、

さらに又、私立中学校日彰館を誕生させる機縁となった、運命の邂逅であった。奥愛次郎と名乗るこの人物は、芝公園御成門外の「北里博士結核治療所」に通うために広島県から上京し、紅林家に下宿していたのであった。この日奥は宮澤に、「御自分も慶應に入学した事がある。[14] 私立中学設立の計画ある事。書籍店を開業して目下東京の金港堂其他の書店と取引開始の為の用務を抱いて上京して居る旨を語り誰か普通学教師は居らぬかと語られた」。

この時の宮澤にとって、奥との会話は「元より関心事でなかった」ため話題はそれ以上には進展せず、彼は別れてその日の内に帰県してしまった。故郷で「数月静居して多年苦学の労を医し」た後、「五月上京下谷御徒町なる観(カ)理学会の編輯員となり文筆ニ従事し同所ニ一戸を構え」、ジャーナリストとしての生活を始めた。

ところがその年の七月、奥は再び上京してきて、突然宮澤に面会を需めてきた。同十三日に彼が半蔵門外の下宿に奥を訪ねると、「普通学教師の斡旋を依頼し遂ニ単刀直入予の就任を勧誘され」ることになった。宮澤は「中央に於て同志と堅く約する処があった」ために、この誘いに容易には動かされなかったが、一方では「苦学の疲れ」が未だ十分には癒えていなかったために、どこか山紫水明の地で健康を回復したいとも思っていたこと、また「五年間ニ私立中学創立を大成するといふ話しが予のアンビションを唆った」こともあった。

一考を約して別れた宮澤は、その後約十日間、父母、学友とも相談したのであるが、「余りニ百八十度の転換」であったから「賛否を明言するものも」ない状況であった。「結局自己の運命ハ自己で決する事」と考えて、奥の申出を受けることに決意したのは、その「人格」に動かされたからであったというのが晩年の宮澤の回想である。

この奥愛次郎という人物には、後にも見るように、どの様な人間であろうとも初対面の内に相手を魅了し自分

の理想に同調させてしまう、一種不可思議な能力が備わっていたらしい。彼の人となりについては、生後間もなく母親が家を去るという不幸があって「近郷の農家に哺育せらるるの已むなきに至」り、「漸く長じて家に帰りしが、継母に弟妹の生まるるあり」と伝えられている[15]から、決して幸福な幼年時代ではなかった。しかし、「稟性は温厚」、「容姿端正、何処となく気品を備へ、恰も貴公子の如きもの」があったと言われている。またその人柄は、「温厚篤実沈毅寡黙一言一行を忽にせず、時に優柔不断なるかの観あり、而かも沈思熟慮一旦決心したる事は、奮進突撃迅雷耳を掩ふに惶(ママ)あらざらしむ」程であったとされている[16]。

この表現に誤りがなければ、わずか二回の対面の内に、宮澤は奥の沈着な態度物腰、中央の文化の光のとどきにくい僻遠の地に中学校を独力で設立しようとする剛毅な野心、それを語る情熱と誠意にあふれた語調に、すっかり魂を奪われたものであろう。奥という人物はそうした一種のカリスマを持っていたと想像される。

一考を約して別れてから十日の後には、宮澤はすでに赴任の決意を固めていた。若い身軽な独身者であったから準備としては「時計を買ひ口鬚を立てる位」のことであり、七月二十七日には早くも新橋駅を出発した。学友の佐藤要吉と、奥と最初に出会った下宿、紅林家の娘[17]が駅頭にこれを見送った。

(1) 「慶應塾義百年史」中巻(前)八〇ページ　慶應義塾　昭和三十八年
(2) 同前
(3) この当時慶應義塾では、毎学期ごとに塾生全員の出欠状況と各課目の評点を印刷した小冊子「勤惰表」を発行していた。
(4) 明治二十七年一月七日付書簡
(5) Arthur Lloyd.(修辞学、英米文学史)、William S. Liscomb(文科主任教員)、H. M. Landis(心理学、倫理学)、小幡篤次郎(塾長)、門野幾之進(論理学)、L. J. Ryde(社会学)、Paul Ehmann(独逸語)、Ludwig Riess(歴史)、飯田武郷(和文学)、坂田文平(漢文学)、森林太郎(審美学)
(6) 明治二十九年九月　慶應義塾発行

(7) 一九一八年五月　本派本願寺布哇開教教務所発行
(8) 同前
(9) 慶應義塾学報　第一号
(10) 「慶應義塾百年史」中巻（前）五六四～七ページ
(11) 「新発田工芸女学校　時報」第六号　昭和四年八月。なお佐藤要吉に関する史料については、新発田中央高等学校長鈴木富男先生、及び遺族の佐藤二郎、康両氏の御配慮によった。
(12) 「日彰館秘史」（宮沢家所蔵）。なお以下本論中宮澤の回想としての引用は特に断らぬかぎり、すべてこの手稿による。
(13) なお「慶應義塾入社帳」に明治二年二月十一日入社の紅林糾なる人物の名がみえる。「主人ノ姓名」を「酒井前少将」とある所から小浜藩士と想像される。この人物と、宮澤の止宿先の亡主人紅林員方との関係が想像されるのであるが、後証にまちたい。
(14) 入社帳によれば明治十八年五月入社。證人は東京本郷弓町一丁目廿六番地　後藤愛憲　である。
(15) 「日彰館創立者　奥愛次郎先生事蹟」、創立者奥愛次郎先生五十年忌日彰館創立六十年記念編　昭和二十八年十一月　三ページ。（なお以下は「事蹟」と略す）
(16) 同前　五十三ページ
(17) 宮澤と紅林家との関係は、単なる下宿人と家主とのそれではなかった様である。その点からも(13)にみた紅林糾と紅林員方の関係が気になるのであるが、現在の所これ以上の知見はない。

## (三)

日彰館はもと吉舎町にあった漢学私塾の名前であった。旧芸州藩々校明善堂の助教を勤めた儒官・高浦豊太郎は、維新後県下の御調郡、豊田郡内で教員を勤めた後、明治十一年に三原町で家塾日彰館を開いた。[1] 十三年、この塾を有志の聘に応じて吉舎町に移したものがそれである。この塾はその後八年間この町に存続したが明治二十一年閉館されている。恐らくは高浦が尾道の商業学校教員に任ぜられたためであろう。奥愛次郎が最初に学問の手ほどきを受けたのは、ここにおいてであった。

その後彼は九州に遊学、白石照山の塾に入って漢学の研鑽を積み、洋学の必要を感じて[2]広島英学講習所に転じ、さらに上京して同人社に入った。この間彼の英学がどの程度に進歩していたのか詳かにしえない。しかし明治十八年五月慶應義塾に入社した時、彼の学力は正規の学生として学ぶには未だ不十分なものであり、また実際に通学した期間もごく短かかったようである。「勤惰表」に彼の名前が表われるのは同年の第二期（五月から七月まで）に科外生として、ただ一回のみである。恐らくは、この間に発病、学業の継続を断念するという事情がかくれているのであろう。その後も度々上京した様であるが、それは営業上の要件や病気加療のためであり、就学のためではなかった。

奥家の家業は醤油醸造業であり、「鉄類販売を兼ね[3]」ていたと伝えられるが、彼自身がその経営にたずさわったわけではなく、自分は書籍店を営んでいたことは、既にみた通りである。勉学の希望を病によって絶たれた人にとって、文化の光に日常的に接することができ、かつ肉体を酷使せずして自立しうる、もっともふさわしい職業選択であったとも考えられる。彼がもしそのままに人生を送ったのであったら、若い時から秀才の誉れ高く、師を求めて遠く九州や東京にまでも遊学しながら、病を得て中途で帰郷した後は、躰に無理のない商売をしながら静かに世を送るという、在村のインテリ読書人としての生涯がまっていたことであろう。

その彼がいつ、いかなる理由から、私立中学校を創立することを思い立ったのか、直接の動機は明らかにしえない。しかしとりわけ向学心の強かった人が、自分自身の勉学が挫折せざるを得なかった時、それが形をかえて、後進の指導育成への情熱となって現われたと想像することは不自然ではない。とは言っても、全国各地に「中学校設立運動」がもりあがり、旧藩校の伝統をひく士族中心の「特権的中学校」にかわって、「国民的中学校」が続々と創立されていった[4]、明治十年代初頭であったのならともかく、時はすでに「中学校令」の施行以後の事で

ある。

明治十九年に行なわれたこの制度改革によって、中学校の教育程度は従来に較べて格段に高いものが要求される様になり、県立中学校は一県に一校を置くことが当面の目標とされる様になった。その結果、それまでに各地の民衆の各様の必要に応じて設けられてきた、やや教科内容の低い中学校は、以後は各種学校としてあつかわれるようになったのが当時の実情であった。したがって私立中学校の創立は、明治十九年以降はそれまでに比して非常に困難になったのであった。このことを奥自身が知らなかったはずはないのである。[5] にもかかわらず彼がこの目的に邁進したのは強い意志と激しい情熱の力によって、この難しい課題を克服しようとしていたからに相違ない。

変則中学校日彰館の授業は宮澤の到着を待って、明治二十七年八月十日に始まった。教員は館主奥の外には僅か二名にすぎない。旧日彰館の塾主であった高浦豊太郎を尾道から再び迎えて修身と漢文の教員とし、それ以外の「普通学」（国語、英語、算術、代数、幾何、歴史、地理、理科）はすべて宮澤が一人で担当したのである。学級は本科と予科各一クラスづつ、生徒は合計で一七名であった。「校舎は四間に七間の酒庫」を改造したものであり、「校具といっても古畳が二十枚ばかりと、飯台兼用の机が二、三脚あったばかり」「図書は、教科書以外、漢籍は高浦先生所有の物が沢山あったが、其他は私が持って来た言海や、ナッタル英辞書ぐらゐの物しかなかった」と言う貧弱な内容であった。

したがって宮澤の校務負担は非常に重いものであり、「最初の一年は無事経過した」ものの、「専門にあらざる数学の問題には相当苦しまされ」、「翌年の初夏頃ニ神経衰弱に陥り病気の苦しみ」も加わって、「時々教壇で卒倒せんとする事もあった」程であったと回想している。

そこでどうしても数学の専任教員が必要であると言うことになり、二十八年十月に、攻玉社出身の松原毎吉を迎え[6]、以後大正八年彼が去るまで、宮澤と二人で校務の中心となって学校運営を行なう態勢ができあがった[7]。

学校経営の財政的裏付けも、ほとんど皆無に等しい状態からの出発であった。館主となった奥の生家も地方の素封家ではあったが、当時その家業はすでに逆調をむかえていたと推測させるものがあり[8]、大きな援助を期待することはできなかった模様である。「五年位すれば生徒増加して授業料丈で維持出来る」であろうというのが開校当時の基本的見通しで、学校としての基本的整備と、そうなるまでの運営費は「学校維持株金」という制度によって賄おうとした。これはこの地方の有志を説いて、「一株金参円とし、五ヶ年間維持寄附を特約」することを要請するもので、株主の子弟が入学する場合には、「一名一ヶ月三十五銭」の授業料を免除し、学費としては五銭の「教場費」のみを徴収するというのが主旨であった。つまり株主になっていれば、子弟の教育について一名につき年間一円二十銭の利得[9]があるというのである。

この制度は相当の好評をもって迎えられた模様で、明治二十八年春までの間に一〇九・五株の応募を得たという[10]。それにしても、維持株金からの収入は月割にして二十七円余、学生を一七名として、そのすべてが非株主の子弟であったとしても、その授業料収入は七円弱であるから、脆弱な財政の程がしのばれる。宮澤自身が告白している様に「日彰館の統計年表に創立時代の収支は六百数十円となっている」のであったが、これは大幅に水増しした数字であった。

そのために教員の給与も実質はかなり低く、「其当時慶應の卒業生ハ教員となるもの月給三十五円」と言うのが世間一般の相場であり[11]、「奥館主の余を聘せらるるや対偶問題ニ付いては」この世間相場を約束していた。しかし実際に支払われた給与は、「表面は三十五円なるも真実実際支給ハ月額十五円と授業料実収入の半分」であっ

た。この授業料収入は、月額十円以内であったから、「余の収入ハ月額二十円以内」で「毎月十円以上寄附した事にしてあった」。それでも宮澤の場合はまだ良い方で、高浦の手取り額は十円以下であった。宮澤はこれを「本館財政上の一秘史」としている。

教員の月給からの強制的な寄附の慣行は、学校存続のためには止むをえぬ苦肉の策ではあったが、他方当然の結果として、教員の補充及び確保を困難にし、校長は転任教員の補充を常に心配していなければならぬという深刻な問題を生み出した。明治二十七年の開館以降大正十四年迄（この年に宮澤は一旦校長を退いた）に、この学校に奉職した教員はのべ一三二名に達するが、その内一〇％は六ヶ月以内に、また三〇％以上の者が一ヶ年以内に辞任している。二ヶ年以内に辞任した者は全体の五五％、七二名にも達している。[12]

奥は「館主」として教壇には立たなかったが、資金の蒐集を初めとする対外的な交渉を全面的に担当した。この面で彼に協力したのは、土地の有力者であり、親族でもあった「幹事」の奥田熟郎と米田養治とであった。[13] 奥の活動は大別して二方面に向けて行なわれた。その一は、新聞を通じて世論に訴え、県議会を動かして、県費による助成を獲得しようとすることである。「地方税補助を以て備後国三谿郡吉舎村私立日彰館を擁護すべき議」[14]（明治二十八年十月）、「学政私議一班」[15]（同三十一年一月十四日　東京毎日新聞）、「聊か所感を記して以て江湖に訴ふ」[16]（年月不詳、芸備日々新聞）等が、この問題に関して発表された彼の論説として今日に残っている。

これらの文章にみられる彼の主張は、次の諸点に要約することができる。その第一は、中等教育拡充の必要性の提言、特に広島県のそれが他県に較べて貧弱であるという指摘である。当時「我国全国を通じて五百の尋常中学校を設置せざる可からざるは教育界一般の輿論」であった。「中等人民は地方の骨髄にして、地方の興敗隆汚一に此の階級人民の品位気格に因って定まる」。「地方骨髄的中等人民たるべき資性を涵養する」ため、さらに

「高等の教育に就かんと欲するものの階梯となるべき学科を授くる教育機関」がすなわち中等学校である。

この文章が発表されたのは、明治十九年の「中学校令」公布からほぼ十年の後である。「地方人民の具体的な教育要求を無視して、いたずらに国家的立場から」「押しつけ」られたと言われるこの法令は、「地方の中学校が自主的に、地方の実情に即して独自の道筋をたどって向上して行く方向を制度的に抑制し」、程度の高い教育内容を一気に要求したものであった。その結果、この地方においても、かつて存在した、いくつかの中等教育機関はこの条件を満足しえず、その資格を失なって行ったため、広島県の場合中学校としては、県下にただ二校のみが存在することとなった。これは「土地狭く人口の寡き」隣県の岡山、山口に比較しても立ち遅れているというのである。[17]

奥の主張の第二点は、教育機会の均等という点に関わっている。すなわち、広島県の場合、このわずか二校の中学がいずれも瀬戸内海沿岸の都市部に置かれている現実に対する批判である。県北の山間部は「斉しく人民汗膏の余適(ママ)たる地方税を負担し乍ら、地方による其恵沢を被むる差違如此甚しきあり。世の教育に志ある士、之を等閑に看過するに忍びんや」と言うのである。

この主張をさらに強めているのは、教育を行なう場としては、都会よりもむしろ田舎の方が秀れているという、奥の信念「田舎主義」である。「辺鄙僻陬の地の以て才徳を養成すべく、都府繁華の人間を墜落(ママ)せしむる魔境たる」という基本的発想である。それを支えているのは、「天下の政権を取りしもの辺鄙僻陬の地より出ざるはなく、又其政権を失ひしもの都府繁華の裡に軟化されし後にあらざるはなし」という、彼独特の歴史観である。

主張の第三であり、かつ彼の教育論を知る上で最も重要と思われる点は、彼の所謂「私学主義」である。「蓋し官学なるものは其行動、政府が厳令せる法規の外に逸出するを得ざるものなり。而して此法規や果して適当無

過のものなりや否や。過去の、寧ろ失敗の歴史たるを顧れば、奚んぞ将来亦同様の歴史を繰返さざるを保すべけんや」という疑問がその根底にある。教育にとって一番大切なことは何か、という問題について彼は「療病」を例にとって次の様に考える。病を治すためには「格段なる人に応じ格段なる治術を施すより善は」ない。それと同様に、教育にとっては「特種の事情に従ひ特種の方法を用」いる事が最も大切である。「縦横自在に自家の所信を実験することを得る」私学教育を、仮に患者の一人一人の病状に合せて個別的に調合した薬だとすれば、「何れへ応用するも余り不都合なき様、彼是斟酌取捨して制定」した法令に拘束されざるを得ない官学の教育は、「喩へば猶売薬の如き歟」と言うのである。薬の効能という点から言えば優劣の差は明瞭である。

勿論、私学に短所がないと言うのではない。「校舎器械図書其他の設備、之を官学の完全整頓に比すれば著しき懸隔」があることは事実である。しかし奥の考え方からすれば、このことが決定的なマイナスの条件にはならないと言うのである。その理由は「教育なるものは全く精神的事業なり。而して其精神作用の霊妙なるや殆んど端倪すべからず」という所にある。教育の本質は、教える者と教わる者との間の精神的交流にあるから、これに関連する物質的諸条件は、単に副次的な重要性を持つにすぎないと考えている。この考え方からすれば、教育事業にとってある程度の物質的困窮は、むしろプラスの条件にこそなれ、マイナスにはならないと言うことになる。「財政豊饒ならざる学校」の「職員たる者日夜寧処に遑あらず、憤を困厄不自由の間に発し、脹胆決眦勇気常に凜々たり、此勇気を以て此精神的事業に当る、其功を奏するや固より当然」であるからである。彼はその実例として、「孤村破窓の下年歯猶若き刑余落魄の一流浪生僅かの子弟を集め、独力以て之を教養せし松下村塾は却て遥かに昌平黌に優るの成果を収め」た事実をあげている。

このような論拠から、彼は従来県財政の恩恵に浴することの少なかった県北山間地帯に中学校を持つことの重

要性を説き、そのために私立日彰館を正則の尋常中学校にするための財政的な援助を、県税をもって行なうよう要求したのである。

当時「小学国民教育の前途猶甚だ遼遠」である時に、多くの尋常中学校を公費で設立することは「官府財政の許さざる所」である。「此時に当り民間有志の徒あり、私財を擲って私学を経営するものあらば、国家の多幸衆庶の饒益、世は應に之れに向って礼拝感謝すべく、政局に当るものの如きは宜しく愛撫以て之れを発育せしめ、勧誘以て此種の学校を倍多からしむべきなり」と言うのが彼の主張であった。

彼の熱心な運動はついに世論を動かし、県議会をして県費による日彰館への補助を行なうことを決議させることに成功した。その結果、明治三十年から三十八年の間に、合計六、四〇〇円の補助が支出されたのであった。

(1) 奥記念館所蔵、高浦豊太郎自筆履歴書（明治三十五年）による。

(2) 洋学者福澤と彼の漢学修行時代の友人との交流は「其後絶て音信を得ず」とのべている所から跡絶えていた様子であるが、旧師白石照山については「一度中津を去り五六年以前より又候帰郷、当時は依旧開塾被致居候」（吉岡密乗宛福澤書翰　明治十年六月十二日付　福澤諭吉全集十七巻二五〇ページ）と伝える様に、かなり親密な交流がなされていた。彼は明治十二年十二月中旬には塾生島津万次郎に托して自著「通俗国権論壱冊」と「詩牋弐箱」を贈っている。白石は子息貞吉を上京させ「二松学校」に寄宿させて学ばせているが、「何れ右学は漢学耳の儒家にては疎略可有之、何卒追て貴塾に入門致し御教授相蒙り度、何分万事宜敷奉願候」（白石常人書翰　明治十二年二月十九日　福澤全集二十一巻　三六七ページ）と述べている。奥愛次郎の白石塾遊学後の行動の背後には照山の影響や示唆があったものと考えられる。

(3) 「事蹟」三ページ

(4) 本山幸彦「明治前期学校成立史」一九六五年　未来社　三一ページ

(5) 先にみた庄原の英語学校「又新舎」の場合も、明治十八年には校舎を新築して「庄原英学校」に発展、「初代校長に福澤諭吉門下の貴虎武俊を迎え……同校には福澤の薫陶をうけた新進の英学者が教師として幾人も招聘されて、慶應義塾の一分校の観を呈していた」が、「二十一年以降……生徒は激減し」ついに、二十五年には「閉校せざるをえなくなっ」（「広島県史」近代1　昭和五五年三月　広島県）ている。

(6) その時の事情について宮澤は「暑中休暇中上京したが……紅林家先代員方氏は当時の学者であって諸方面との交際あり、従って未亡人も知己があった。攻玉社出版の数学書を一手に引受けていた白石氏も其一人なので其の紹介により攻玉社の田中君雄鈴木長利氏等の推薦により」松原をうることができた。「奥館主と予の邂逅も松原氏と予の結合も紅林家の仲介によったのであるが之ハ表ハれた事実でハないがそのまま葬り去るのは餘りニ惜しいから」として、前掲「日彰館秘史」に記載している。

(7) 「爾来教務は予と松原氏のコンビを中心として兎角二十五年間本校の教育を担当したのである」(「日彰館秘史」)。

(8) 年代不明(明治三十三年か)宮澤宛書翰はその間の事情を推察させるものがある。

「昨夜重ねて御依頼書発しゆ処今朝金子四十円為替到着多謝々々。何やら彼やら御心配中重ねてカヽルヿ迄御依頼恐縮之至ニ奉存ゆ。

学校之事彼是御苦心万々御推察申上ゆ得共年此上万事宜敷奉願上ゆ。小生も日々奔走苦心計画罷在ゆ。帰国之節ハ少しハ獲物を鶯し帰り度ものと相励み居ゆ。併し頻りニ家事之都合ニより帰国せよと促され少しく困り入申ゆ。今帰りてハ折角の計画も画餅ニ帰すへし。六十一歳之老父なれハ小生も気之毒ニ思ひ苦心千万御推察被下度ゆ。不図餘計な愚知ヲコボシ恐縮々々。餘りノ金何卒御心配被下度奉願上ゆ。絹地ヲ可成多くスル積ニゆへとも絹地百枚買入ルレハ弐百円ヲ要しゆ。而して百枚位ハ無造作使ハレゆ。併し絹地でなくてハ直打ナシ。

書物ノヿ承知致しゆ。

五月七日　夜　愛生

宮澤大兄　」

(9) 三十五銭の月謝を十二ヵ月払えば四円二十銭となる。それが三円ですむからである。

(10) 「事蹟」十ページ

(11) 宮澤の学友佐藤要吉が卒業後はじめて福岡の尋常中学校に赴任した時の月俸が三十五円。三年後に熊谷の中学に転じた時が四十五円。さらに三年後に新発田中学校に転じた時は五十五円。さらに同女学校長に転じた時は五十八円であった。(「新発田中央高等学校創立六〇周年記念誌」二十六ページ)

(12) 「日彰館館報第三六号　創立九〇周年同窓会会員名簿」昭和六十一年十二月による。

(13) 「事蹟」八ページ

(14) 同前　十一～十五ページ所収

(15) 同前　十六～二十一ページ所収

(16) 同前　三十一～三十六ページ所収
(17) 本山幸彦　前掲書四六ページ

## (四)

奥が行なった学校財政のための、もう一つの活動は、彼の所謂「揮毫蒐集」の運動であった。世に人気のある日本画家や書家、あるいは評判の高い貴顕名士を歴訪し、彼らを説いて片端から学校設立の主旨に賛同せしめ、寄附を約束せさる。ただ通常の募金運動と異なって巧みであったのは、それを直接金銭によって乞うのではなく、絹地や料紙を渡して染筆を依頼し、作品を地元に持ち帰って希望者に頒布して資金を作るという形をとったことであった。その場合、一部の専門的画家や書家に対しては潤筆料を支払ったのであるが、多くの場合は材料を渡すのみで、学校設立のための寄附金を揮毫によって仰ぐという形式をとった。

彼はこのために明治三十、三十三、三十五年の三回にわたって上京し、卒業生で東京の上級学校に進学した者数名と共に一軒の家を借りて、毎日精力的に市内各地の画家・書家の居宅を歩き廻って製作を依頼・督促し、また著名人に面会してその揮毫を乞うたのであった。(1)

彼が書画を依頼した人々の住所と先渡しした紙や絹の分量を記入したメモが今日残っているが、これによって彼が配布した材料の数量を計算すると、絹・絖は日本画家を中心にして三六一（単位は不明。「反」か）。紙、扇面、色紙、短冊は四、七七二（同前、「枚」か）にのぼる。日本画家（今日著名な大家となっている人では、下村観山、川合玉堂、橋本雅邦、横山大観、菱田春草、久保田米僊、野村文挙、小堀鞆音等がいる）、書家（巌谷一六、成瀬大域、金井之恭、日下部鳴鶴等）、貴族・官僚政治家（近衛篤麿、伊藤博文、西郷従道、品川彌二郎、樺山資紀、平田東助、清浦奎吾、金子堅太

郎、伊東己代治、佐野常民、鳥尾小彌太、渡辺国武、芳川顯正、大鳥圭介、九鬼隆一、榎本武揚、三好退蔵等)、政党政治家(尾崎行雄、犬養毅、河野広中、島田三郎、神鞭知常、鳩山和夫等)、ジャーナリスト(福地源一郎、岸田吟香、矢野文雄、田口卯吉、池辺吉太郎等)、実業家(渋沢栄一、森村市左ェ門、井上角五郎等)、学者・教育者(沢柳政太郎、杉浦重剛、坪内雄蔵、小幡篤次郎、細川潤次郎、重野安繹、岡千仞、三島中洲、井上頼圀、下田歌子、跡見花渓、三輪田真佐子等)、宗教家(釈雲照、釈宗演、島地黙雷、大洲鉄然、南条文雄、本田庸一、芦津実全、鴻雪爪等)、作家、歌・詩・俳人(尾崎紅葉、佐佐木信綱、落合直文、税所敦子、国分青厓、其角堂其一等)。諸方面の著名人の名前がみられ、その数は全体で二百数十名に達する。

いかに地方の素封家の出であるとは言え、慶應義塾を中途で退学した田舎の一私学の経営者にすぎぬ奥が、当初からこの様に多人数かつ多方面の名士達に、協力を依頼しうるだけの広く深い交際と信用を持っていたとは想像することができない。今日語りつがれているエピソードは、彼がかつて円覚寺に参禅した折、釈雲照老師の知遇をえ、深く信頼されるところとなり、老師の紹介によってその許に参禅する幾人かの有力者に面会、その主旨に賛同させることを得、彼らを通じて次々と、さらに多くの名士達への紹介をうけていった、と伝えている。

ことに品川彌二郎は「幾百枚の名刺を」「一任して其欲する所に出入せしめた」[2]と言われているが、これらの人物の中にはいくつかの人脈のルートを辿ることが可能である。全般的にみて、保主主義者、貴族院・枢密院関係者が多いのであるが、さらに細かくみれば例えば近衛篤麿、長岡護美、神鞭知常、岸田吟香、杉浦重剛等は東亜同文会の有力メンバーである。また西郷従道、品川彌二郎、佐々友房、利田彦次郎、井上角五郎等はこの当時山縣系の「吏党」の中心であった「国民協会」の中心的リーダーであり[3]、平田東助、金子堅太郎、伊東己代治、渡辺国武等は伊藤系の官僚政治家の大立物であった。さらに釈宗演、芦津実全、島地暗雷は明治二十二年一月、

仏教界の「十二宗綱要」を編纂した時に、それぞれの宗派から委員として出席した仲間であり、その交際は以後も永く続いたものと判断される。[4] したがって、これらの人脈の一角にとりつくことができれば、以後は次々の紹介によって、協力者の輪を広げて行くことは可能であったろう。

それにしても、有力者の紹介や名刺のみで、これ程までに広い範囲の知名人を動かして、例え揮毫によるとはいえ、見ず知らずの田舎の中学校の経営に協力させるとは、通常の人格のよくなしうる所ではない。すでに見た様に、奥という人物の、対面者を魅了し、所説に賛同せしめずにはおかない不思議な能力の介在を前提としなければ理解できない。「温厚なる風容端正なる態度、醇々として説き去り説き来る時、熱誠眉宇の間に溢れ、対手をして思はず同情の感に打たしむ」[5] と表現されている彼の風貌、また「予の氏を知るは近年にありと雖も、氏の都下に出づる毎に輙ち来りて予を訪ふ。終始唯教育の談のみ。一も余事に渉れること無し、篤志と謂はざる可けんや」と島田三郎が評した[6]様に、純粋に教育のみを考えた真摯な人柄が、接する者の心を動かしたのであろう。

この様にして集められた書画の類は一万一千点と言われ、それらは広島県北部の八郡を中心とする有志九百九十人の間に、明治三十三、三十五の両年に行なわれた抽籤会において、寄附金二円を行なった者に対して一枚の割合で頒けられた。その結果「一一、一八十三円」[7] が集められたと言われている。

(1) 前節の注(8)に引用した奥の書翰が、この運動の様子を如実に伝えている。
(2) 「事蹟」四四ページ
(3) 奥谷松治「品川弥次郎伝」高陽書院　昭和十五年
(4) 釈宗演の年譜「楞伽窟年次伝」(釈敬俊編　大中寺　昭和十七年) によれば、明治四十四年二月、島地の訃報に接した釈は「偈以て之を悼」み、曽陪筆硯編綱要　閑夢廿年時已逢　末後果然唯一黙　怒雷依日吼寒飈　と作詩している。
さらに同年次伝に出てくる人名で、奥の依頼者と重なるものをあげれば、三島中洲、重野安繹、鳥尾小弥太、勝間田稔、渡辺国武、芦津

実全、高木兼寛等のである。
(5) 「事蹟」四四ページ
(6) 同前　四八ページ
(7) 同前　五〇ページ

## (五)

日彰館創立時の基本的整備はこのようにして集められた財源によって、どうやら可能となった。しかし初期の日彰館を苦しめたもう一つの問題は、学生の募集であった。元来、県北山間部に中学校が無かったことが日彰館を設立する主要な動機の一つであり、かつ県費による補助を要請するにあたって、奥の主張の有力な論拠となったのであった。彼の熱心な運動の結果、すでに見た通りの県費による助成がなされたのであるが、この運動が他方に於て、県立中学校一校をこの地域に新設する運動の火種を落す結果となったのは皮肉であった。

その際、日彰館自体を県立に移管するという案も出されたのであるが、先に見た奥の「私学主義」の理念はこれを容れるべくもなく、言下に拒絶した。またこの地域の各町村による熱心な誘置運動が起り、その設置場所は容易に決定しなかったが、曲折の末、結局日彰館のある吉舎の町からわずかに二十キロメートル弱しかはなれていない、三谿郡八次村（現三次市内）に新設されることになった。

県立第三中学校の開校が与えた影響は深刻であった。「官尊民卑思想の盛んな時代堂々たる校舎が立ち多数の職員が新任された。狭少なる校舎と小（ママ）数の教員にて教育を施す私学たる本館に及ぼす影響は予め分っていた」と宮澤は回想している。三中第一回の生徒募集には日彰館の三年生から編入した者も多く、そのために一学級を減少させなければならなかった。結果は授業料の減収に直結し、開校後四年、ようやく安定しかけた学校の財政に

大打撃をあたえた。しかし奥と宮澤との、あくまで私学主義を堅持する決意はその事によっていささかもゆるがなかった。「我ニ三合の米と一撮の塩を与へよ。壇浦迄本館を死守せん」という、校史に「壇浦演説」の名で残る悲壮な講話を行って、宮澤が職員と生徒とを激励したのは、この時であった。

こうした時に、あくまで日彰館に残った生徒達には「流石に気概(ママ)あり勇気あるもの」がそろっていたとみえる。このクラスはその後、上級学校への進学において非常に好成績を残し[1]、「日彰館侮るべからずの聲が諸方に起」った。このことが職員、在校生に非常な勇気を与え、奥・宮澤の信念をいよいよ鞏固なものとし、また入学生の増加につながったため、学校経営の危機を脱することができた。

日彰館にとって次の大きな課題は、文部省の制度では各種学校に区分される所謂変則中学校から、正則の中学校となるかどうかという問題であった。それは一つには資金難のために文部省の認可を得るに足るだけの施設を容易に備え得ぬという財政上の問題でもあったが、より根本的には、奥の「私学主義」が、むしろ文部省の拘束を嫌っており、必ずしも正則の中学校となることを第一の希望としてはいなかったことにも関っていたと思われる。

日彰館の卒業生は、変則の中学校であるために軍関係の学校を除くの外は上級学校の受験資格を持っていなかったことは確かであるが彼らは、卒業の半年前に上京し、「杉浦先生の日本中学」に編入して形式的にその卒業生という資格を得て、受験することができた。事実第一回の卒業生が、すぐ近所に新設された県立第三中学校との競争の内に、上級学校への進学で好成績を残しえたのも、この条件の内に於てであったから、奥はこの点をあまり深刻には考えておらず、むしろ好機会の到来をひそかに待っていたようにも思われる。

彼の性格として「その自信鞏固なるものあるも亦豹変の融通なきにあらず[2]」と言われているように、密かに熟慮を重ね十分準備をした上で、一度決意すれば断固として実行するという式の所があった。明治三十五年一月、

突如として認可申請の事を言い出し、宮澤を呼んで手続を命じたのもそうした彼の性格のしからしむる所であったと思われる。宮澤はその時の様子を次の様に回想している。「予は願書を持参して県庁ニ出頭時の江木千之知事の決裁を得更ニ上京文部省ニ出頭普通学務局長沢柳政太郎氏ニ面会陳情したるニ同氏ハ已ニ奥館主を知り従って本校を熟知せるを以て議会開会中なるニ拘らず待つ事周日二月二十五日文部省認可は下り……」。近代日本の代表的な教育官僚の一人であり、又教育者でもあった沢柳と奥との出会いがどの様なものであったかは知るよしもない。しかし彼は奥の蒐集した多数の揮毫の潤筆者の一人であり、彼がその要請に応じたということは、奥の理想や計画に賛同・同調していたことを意味するものである。明治三十一年以来沢柳が許可の主務たる地位にあることを知っていた奥は、彼がそのポストについている間に事を運ぶのがよいと考え、秘かに条件の整うのを待っていたと考えられる。(3)

これとほぼ同時期（明治三十四年）に、日彰館は高等女学校を併設している。これは当時における女子教育熱上昇の気運を見越して、二、三の専任教員を招くの外は、中学校経営の余力をもって兼営して、学費収入の増加を図ろうとした奥のアイディアから生れたものであった。その当時はこの地方は勿論のこと、県内にも女子の中等教育機関が少なく、他地方からも入学者が集中する勢を見せたのであった。しかし中学校の場合と同様に、開設後数年の内に、二、三の公立女学校が附近に新設されるに及んで、入学者の減少を招き、そのままでは廃校もやむなしと言う状況にたち至った。

これに対抗するために日彰館は、財政のやりくりの苦心を重ねた末に、たまたま義務教育年限が四年から六年に延長され不要になった附近の小学校々舎を購入して設備を整え（明治四十二年）、ようやく存続させることができた。

このような創立時の困難と苦心の裡に、明治三十六年、奥は持病であった結核が悪化し、急逝してしまう。その結果宮澤は、創立後間もないこの学校の運営の全責任を托されて、なじみの薄い異境の地に、一人残されることになった。吉舎に赴任して九年余り、三十四歳の時であった。この日から彼の東奔西走の大活躍が始まる。

宮澤の行なった学園組織上の第一の仕事は、これまで法律的には奥愛次郎個人と分離されていなかった学校経営の母体を、財団法人として独立させることであった。奥の在生中は、館の財政と館主個人の財産が未分離であったことは、創立時の事とて、むしろ当然のなりゆきであった。生涯独身であった彼の没後も、奥家の相続人は、同家の家業と共に学校財政をも継承して管理にあたっていた。しかし「日彰館は私立なりとハいへとも決して創立者の私有ではない。又私有とせられる意志もなかったと思ふ」と回想されている様に、学校を財団組織にして学校財政と個人資産とを分離させることは、館の発展のために当然の処置と考えられた。ただ、学校創立時及びその後の基本的整備を行なう過程で、奥家及びその近親の協力者が学校のために立替えた金額があったので、それを債務に計上し、この組織替えに際して新たに計画された「維持株」三万円の募集申し込み証を債権として、現有の校地校舎を基本財産にして、大正元年に財団が成立した。

日彰館と奥及びその近親者とのその後の関係は、愛次郎の後継者である新一郎が理事の一人としてあったが病気退任、その後奥一造が教員及び幹事として、さらに館長として数年在任したがその後途絶えてしまった。宮澤はそれについて、「世の財団中、個人の出資による同族的の者は相続人を理事ニ請招するもの多きも、本館財団の性質ハ所謂衆縁和合なるニ鑑み、本館の維持ニ功労あり且つ維持の識見手腕あるものを衆望ニより選挙するを当然と考ふるものなり。若し夫れ将来奥家より此の如き資格の人の出づるあらバ之を館長ニ選挙するハ尤も好ましき事なるも、奥家出身の故のみを以て館長ニ選挙するハ大ニ考慮すべきものと思考す」と考えている。

この学校の発展を年次別の卒業生数の推移からたどると、[4] 中学校の場合、明治三十年代後半に急速に増加して四十一年には一つの頂点に達する。今仮に一律に五ケ年の修業年数を差引けば、三十年代後半に入って、しだいに学校の評判が高まって入学者が増加して行ったことになる。これは先に見た奥の基本金創りの活動が効果を生み出し、卒業生の上級学校への合格成績が良好であることがわかり、また文部省の認可を得て正規の中学校ともなった時期に相当する。

明治四十二年からの数年間は、中学校は三十～六十名の間を増減し、女学校と合せても六十～八十の間をゆれ動いて、不安定である。しかし第一次大戦による好況の影響が出はじめる大正四、五年のころから入学者は増加しはじめ、以後昭和恐慌のための急減がみられる昭和七、八年までの間、約十数年はほぼ安定して、中学は五〇～七〇名、女学校を合せて一〇〇～一二〇名の卒業生を毎年出している。

昭和七～十三年の間、中学では最低二七名（十二年）まで減少し、創立当初の一時期を除けば最も卒業生が少ない。女学校の方は中学よりも減少の程度が小さく、又回復するのも早かったが、両者合せて七一名（昭和八年）は大正以降の最少の記録であった。

昭和十四年以降は戦争景気による就学者の増加と都市部からの疎開者の流入とによって、急激に生徒数が増加し、三〇〇名を越える卒業生を出した昭和二〇年をピークとして、旧制度の終了する二三年には二五〇名以上を数える。

宮澤は明治三五年から大正末まで中学校長を勤め、その間、三八年以降は女学校長をも兼任した。その後一時期校長を他人にゆずったが、昭和三年からは再び中学校長として、十七年まで勤めた。その間の彼は学校のために主に二種類の重大な任務をはたさなければならなかった。その一は、転勤する者が多く、勤続年月の短い教員

の補充につねに追われ続けたことである。ある時は担当者の突然の辞任で後任の見当らぬままに、女学校の家政科の授業まで担当したという。

他方、彼は奥亡き後の経理の責任者として、従来奥がひきうけてきた、学校財政の確立の運動にも力を注がなければならなかった。すでに見た様に、財団設立時の基本財産である、一口三十円、一、〇〇〇口を募集した「維持株」は、実際にはその一部分が現金で支払われていたのみで、大部分は申込み者が財団から借金をしているという形で、つまり財団の債権として、計上されいた。したがって、これを回収して行くことが、財団成立以後の、宮澤の主要な任務の一つであった。「父の苦労は辞めて行く先生の後任の確保と寄附金の募集の二事につきると言ってもよい程でした。夏休みもほとんど家にはおらず、常に卒業生の間を廻って寄附金を募って歩いていました」と言う、家族の思い出は[5]この間の事情を物語るものであろう。

彼は戦争景気によって、昭和十四年頃から増加し始めた学生数が、ほぼ定着したと考えられた十七年、学校経営の安定を見届け、一応の安心をするとともに、「万事統制の世の中」を迎え、それまで約五十年にわたって育ててきた学校の将来について「公立と私立の折中(ママ)の如きものが出来るにはあらざるか」という不安の念をいだきつつ、校長を辞任した。偶然に出会った母校の先輩の情熱に動かされて、全く見ず知らずの土地の新設学校に教頭として赴任してから約五十年、学校経営の全責任を一身に背負って校長の職にあること通算三十七年、年齢はすでに七十二歳に達していた。

この頃、彼が自分の一生をふり返って自編の写真アルバムを手作りした事はすでに述べた通りである。その中で青年時代の夢を回顧した第一ページの次は、二十代後半から四十代までの肖像写真三葉を前ページと同じ様に横一列に並べて、その脇に「二十七才　教頭・焦燥煩悶」、「三十三才　新校長」、「四十一才　南船北馬東奔西走」

と書き込んでいる。そうして第三ページには奥の写真を貼って「一朝吉舎入りを決せしむ」と書き、若き日の夫人の肖像をその隣に配して、「吉舎を墳墓の地と定めしむ」と記入している。

我々はこの宮澤の編集の内に、晩年の彼が自分の一生をどの様なものとして考えていたかを明瞭に読み取ることが出来る。田舎の中学生が大志を懐いて東京に学び、ふとした偶然のきっかけから先輩の情熱に動かされて、未知の土地で教育に従事することになった。しかし事は容易には運ばず、前途への不安とあせりは時に彼をして、すべてを投げ出して故郷へ帰る決意をさせることもあった。[6] 就中、頼みとすべき先輩が、業半ばにしてこの世を去り、にわかに学校経営の全責任を負わなければならなくなった時の困惑と迷煩とは想像に余りあるものがある。

こうした彼をぎりぎりの点で思い止まらしめ、初心を貫徹し、この土地で教育者としての生涯を全とうせしめたものは、自分を動かした先輩の人格と情熱への敬慕共鳴であり、またこの地生まれの夫人の内助であった。

同じ頃、宮澤は四十七年前の夏奥から受け取った私信一通を篇額に仕立て居室の欄間に掲げ、額の裏面に次のような感慨を書きしるしている。

「明治二十八年夏余西下後初東上。途中大雨。垂水駅以東汽車不通。乃徒歩行進遂泊於大垣。……翌日賃船至岐阜。僅得投汽車急遽帰郷。則犀川（信濃川上流）亦汎濫堤防決潰濁水滔々貫流居村。此時奥先生賜慰問状者即是矣。蓋先生遺墨所蔵有数十通。何係館之機密。本書不然。文意懇切筆致高雅。足偲先生風格。乃掲座右日夕拝其遺芳。昭和十七年夏日　於櫻溪村荘七十三澤翁識之」。

筆者はこの文章の巧拙を云々する意図も能力も持ち合せてはいない。ただここに、若い日の宮澤が奥と共有した理想と信念とが、約半世紀にわたって絶えることなく、彼の中に燃え続けていた左証を見る、と考えるのである。

(1) 奥は明治三十二年十二月二日付の芸備日日新聞に「敢て中学生及其父兄諸君に告ぐ」と題して、日彰館の学費の低廉なること、学科の程度生徒の実力の優秀であることを説き、その証拠として第一及第二回の卒業生の中に陸軍士官学校五名、海軍兵学校一名、第一高等学校二名の合格者を出していることをあげている。
(2) 宮澤「日彰館秘史」
(3) 成城学園沢柳政太郎全集刊行会編「沢柳政太郎研究」年譜
(4) 前掲「日彰館同窓会会員名簿」による。
(5) 長男宮澤和人氏談
(6) 同前

## (六)

明治の世の中が十年の節目を迎えた年頭にあたって、福澤諭吉は「明治十年一月一日之文」[1]を執筆して次の様に警告した。

いま仮に明治元年生れの者を想定すれば、その子供はこの年十歳になっているはずであり、「寿命の春にして、正に進むの時」「正に学ぶの時」にあると言える。その彼は五十年後には「一家の主人と為り」、「世の為に働き」、「人を教へ人を導き、漸く退て二代目の少年に譲り渡さんとて、其用意を為す者」になっているはずである。

この少年の成長のように、明治の社会が今後順調に発展し、「明治三十年の世の中は明治十年の有様を顧て気の毒なりと思ふ勢」になることができれば、明治十年の「一月一日は誠に以て目出度くして祝儀を申す可きなれども、余輩の考にては何分にも斯る目出度見込を立て難い」と言うのが書き出しである。

その理由というのは、「今の年分の先生達がよく子供を導き、子供も亦よく学問を勉強するは至極目出度きことなれども、其学問の成就したる上にて之を用る場所なきは当惑の至りならずや」と言う点にある。

明治二十年、彼らが二十歳になった時、その学問をもって政府の官吏になろうとしても、「明治十年に於ても政府には人物甚だ多くして餘ある程」である。「官員の席は、二、三万に過ぎ」ないのに対して、これを望む者は、士族の中からだけを考えても希望者四十万人として「志を得たる者は十分の一に足」らない。他方、学校の教師になるとしても、「明治六年文部省の年報」から逆算して、ごく一部の者をのぞいては、「一年の所得平均二十五円に足ら」ぬ待遇に満足しなければならない。

さりとて何か企業を興すに足りるだけのまとまった資本を彼らが持っているわけではないから、結局このままで行けば、彼らに残された方途は「幸に親より譲り受けたる小金を」元手にして「高利貸」でも始める以外には活計の道は考えられないという事になってしまう。他人に忌み嫌われるこの職業に就くためにわざ〳〵苦労して今、学問をするというのは「甚だ不都合」であるということになる。

彼独特の辛辣な諧謔を交じえて、軽妙な筆致で進められた、明治初年生れの少年達が今熱心に学んでいる学問が、三十年代になって真にその活用の場を得るためには、今後どの様な準備をしたらよいかという、福澤の論旨の結論は、「地方に銭が落るやう、中央に金の集らぬやう、地方に細に事の起るやう、中央に大に業の起らぬやう、地方に学者の散じて土地の事を行ふやう、中央に人物の群衆して直に政府に迫らぬやう」に配慮すべきであるというところにあった。

時は正に政府の主導によって殖産興業の政策が強力に推進されている最中である。政府は自からのイニシアティブにおいて、近代産業の導入移殖に全力を傾注していた。それが政府の指導によるものであるかぎり、中央集権的であり、一部の大都市に集中する性質をまぬかれなかった。同時に、政府に改革を求める人々の行動も、中央に出て、直接政治的働きかけを行なう運動としてその機運が醸成されつつあった時期でもあった。

教育に対する世人の情熱は急速に高まりつつある。「今日諸方に学校も多く、又子供ある人の其子を教へんとする者も多き世の中」[2]となりつつあった。同じ福澤が「人は生れながらにして貴賤貧富の別なし。唯学問を勤て物事をよく知る者は貴人となり富人となり、無学なる者は貧人となり下人となるなり」[3]と言って、やや手離しに学問をすすめた明治四年の末から、わずか数年の後には、教育を受けた者の数に比較して、それにふさわしい就業の場の狭隘であることを心配しなければならなかったのである。

この福澤の警告が、学問をする者の絶対数が多すぎることに対して発されたものでないことは言うまでもない。その本旨は、このままでは、学問を身につけた者が進んで身を投ずべき場や機会が、すべて都会に集中してしまうと言う予言であり警戒である。さらに言えば、近代的な学問や技術を身につけた労働力が全国各地に散って、それぞれの地域に於て近代産業や教育の担い手になって行かなければ、真の意味での日本の文明は望みえないと言うのが福澤の基本的な考え方であった。

本論でとりあげた二人の門下生、奥愛次郎と宮澤順定とは、それぞれ慶応元年と明治三年の生れである。福澤の言う明治十年に十歳である子供を間にはさんで、彼らの生年は数年の間に相前後している。したがってほぼ同世代と言うことができよう。

宮澤が「苦学」して慶應義塾大学部文科二回生として卒業した時、彼及び彼の仲間を待っていたのは、福澤の警告にあった様な、小金を元手に高利貸でも始める以外には生きる途がないという程の状況ではなかった。七人の同期生はいづれも一、二年の内には、いずれかに職を得て活躍を始め、その後に種々の曲折はあったとしても、後世の者の眼から見れば、結果としてはそれぞれの分野で大きな社会的意義を持った生涯を送ったと言うことができる。

しかし彼等の生涯は決して平坦順調なものではなかった。その内の一人である宮澤については本論に見た通りであるが、その一生は苦闘の連続であったと言っても過言ではない。換言すれば、「地方に学者の散じて土地の事を行ふやう」にしておかなければならぬという、二十年前の福澤の警告は、「明治元年の生れ」の子供が成長するまでの間は実行に移されえず、むしろこれから解決すべき課題として成長した彼らの眼前に横たわっていたのである。奥と宮澤とが生涯を通じて闘ったのは、この二十年間の立ち遅れを、如何にして取り戻すかと言う課題であったとも表現しうる。

彼らの苦心の生涯において、かつて福澤の塾に学んだと言うことが、どの様な意味を持ったかと言うことは俄には判断できない問題である。彼ら二人が教育上の理念として常に意識していたものは、彼らの恩師である福澤ではなく、むしろ吉田松陰であった。また理想の学園として念頭に浮べたものは、少くともその当時の慶應義塾ではなく、むしろ松下村塾であった。

このことは日彰館の卒業生のその後の進路を見ても明瞭に理解しうる。彼らが理想としたのは、官僚もしくは軍人の養成機関への進学であったし、奥や宮澤もまたそれをよしと考えていたと思われる。[4] 創立以来昭和二十四年迄、約三、〇〇〇名に近い旧制中学校の卒業生の内、慶應義塾に進んだ者は僅か数名を数えるにすぎないことから考えても、奥や宮澤が決して単純なる師福澤の模倣者・追随者ではなかったことは明らかである。また驚く程の質と量とをもって、旧日彰館中学校から引き継がれた今日の県立日彰館高等学校の蔵書[5]の中に福澤の著作は、管見のかぎりでは、一冊も見当らない。

宮澤が恩師福澤や母校慶應義塾について、どの様に考えていたか、知りえたかぎりでの唯一の資料は、すでに本論にしばしば引用した昭和十七年執筆の回想録（「日彰館秘史」）の末に、二十年一月に自からの死の近いことを

予期したように追補された一節の中に見出される。

日彰館の歴史の上で、宮澤が残した最大の仕事であり、かつ彼が最も苦心してなしとげたことは、同志であった奥愛次郎死亡の後、学校経営の主体を奥家及びその親族の個人から切りはなし、財団法人によるものとしたことであったのはすでに述べた通りである。すなわち、彼は日彰館を創立者（彼自身をも含めて）個人及びその子孫の私有物ではなく、一個の公器として永久に残すことを考えたのであった。その場合、彼が参考にしたのは他ならぬ彼の母校の組織であった。

それについて次のように述べている。

「日彰館の独立ハ館祖と自分の人生観の照合によりて行動ニ入り、その精神が寄附行為の立案ニより合法化し成文化したのである。故ニ此の顚末を書残す事ハ有意義なりと信ずる。抑々両者合意の人生観といふのハ人間生を皇国ニ受く、宜しく何等かの痕跡を此の世に残し以て人生を有意義ニせん。而して此の痕跡を私学教育の創立経営、その私学ハ日彰館の名ニ於てせん、といふのである。（中略）初代校主已ニ他界したる後ニ於ていよ〳〵此の私学を財団ニ引直し館主の精神を成文化合法化せんとしたのであるから、財団の憲法たる寄附行為を立案するニハ飽迄此の創立精神を編み込まなくてハならぬ。而してその責任ハ創立関係者唯一の生存者たる自分の双肩ニあった。仍って種々考察の結果、[6]その骨子ハ慶應義塾の寄附行為ニ準據したのである。抑々慶應義塾ハ全く福澤先生の創立ニかかり、その創立財産も全く福澤家の財産の一部たる三田山上の敷地一万餘坪を提供されたのである。而かも福澤家ハ決して之を私有視せぬのであるが、寄附行為ニハ財団解散の暁ニてハ敷地ハ之を福澤家ニ還附する事を規程し、其の他の経営処分ハ一々之を財団の議決機関たる評議員会の議決ニ待つ事とした。唯財団の最高位置たる社頭ハ福澤家の当主たる事ハ不文律として今迄実現して来たのである」

と述べて、唯だ慶應と日彰館との相違は、「日彰館ハ地方有志の出資ニなる旧日彰館の校舎敷地を引き継ぎ、他

ハ一切地方有志、中央篤志家並ニ出身者の醸金と幹部教員の献身的寄附（俸給の一部）ニより出来た」学校であるから、奥館祖とその相続人との間には「格別福澤家と慶應義塾の如き因縁」があるわけではない。だから「財団を解散する場合ニも残餘財産ハ創立者の子孫ニ贈与する慶應の規定ニ倣ハず、類以目的の為めニ使用すると規定」して、「残餘財産を私せず、精神ハ財団の財産と共々永久ニ持続活用して以て創立者及関係者の功労をも共々永遠ならしめんとした」のであった。

彼が日彰館に托した自己の理想を永久のものにしようとした時、彼が見倣ったのは母校の組織であり、それを生み出した福澤の考え方であったこと、さらにその経緯を最晩年になってから、わざわざ加筆追補したことは、重要である。

五十年に近い校長としての生活の内で、宮澤が演説をしたり訓辞を行なう機会は恐らく数えきれない程多かったにちがいない。しかしそうした場合に彼が生徒等の前で福澤について言及したことを記憶している人のあることを寡聞にして知らない。また彼が福澤の書物を読んでいた形跡も、少なくとも日彰館に赴任した後においては、全く見当らないことはすでに見た通りである。

しかし先に引用した宮澤の文章を読む時、ひとは彼が若い日に福澤の門に学んだことの意義は、死の直前に到るまで、彼の精神と行動の底に脈々と生き続けていたことを感じざるをえないのである。さらに彼ら二人の生き方と彼等の理想としたものの本質は何であるかを考える時、ひとは彼らの所謂「私学主義」が福澤も又求めていたものと同一の内容であり、[7] また彼等の「田舎主義」は、明治十年に福澤が「地方に細に事の起るやふ」にしなければならぬと警告した、日本の真の文明のための必要条件の実現を、ずっと後になって一生をかけて試みたものと理解することができるのである。

この二人の門下生は、生前福澤について表立って語ることはなかった。しかし彼らの生涯そのものが、正しく師の精神を体現したものであったことは、彼らが言葉の真の意味に於ける門下生であったことを雄弁に物語っていると言えるのではないだろうか。

(1) 「福澤文集」巻一「明治十年一月一日之文」(明治十一年一月)、「福澤諭吉全集」第四巻　四二六～九ページ
(2) 同上「教育之事」同前全集第四巻　四二二～三ページ
(3) 「学問のすゝめ　初編」(明治四未十二月)「福澤諭吉全集」第三巻　三〇ページ
(4) 前節註(1)で引用した奥論説に紹介されている第一回、及び第二回の卒業生の進学者は、第一高等学校、陸軍士官学校、海軍兵学校、東京郵便電信学校である。これは「昨三十一年十二月八日の芸備日日新聞に掲げられし本館出身者成績表」として引かれたものであるが、前掲「日彰館同窓会会員名簿」によれば、この外に最終出身校を「早大」としたもの二名、「明大」としたもの一名がある。
(5) この図書は明治三十六年、奥長逝後にその「感化を永久に存続せしむべく記念事業として」企図された「記念文庫」をひきついだものである。これには島田三郎、釈雲照等が力を尽し、「森村市左衛門氏を始め三百六十名、千円以上」の寄附金が集められて、四十一年に創設されたと言われている。(「事跡」七五～六ページ)
(6) 彼の学友であった石田新太郎が、当時、慶應義塾の「幹事」として、塾長を補佐・代理する役職に就いていたことが、何程か情報源としての役割をはたしたものと想像される。
(7) 福澤の行なった、学校経営における公私の得失の比較(「学校之説」・明治三年「福澤諭吉全集」第一九巻　三七三～七ページ)と、奥の「学政私議一班」とを比較すると大変興味深い。約三十年を隔てて、間違いなく独立に(奥による福澤の文章の参照なしに)書かれたこの二つの文章で、筆者は用語こそちがえ、内容は全く同一のことを主張している。福澤の結論である「右所論の得失を概して云へば、官学校は教育入用の財あれども、此財を用ひて人を教るの術に乏し。私学校は人を教て世の裨益を成すべき術に富めると雖も、此術を実地に施すべき財に貧なり。故に学校を建てるの要訣は、この得失を折衷して、財を有するものは財を費し、学識を有するものは才力を盡し、以て世の便利を達するにあり」は、第三節で引用した奥の「私学主義」と驚く程に似かよった内容である。